

編：田中 勝，安齋 眞一

皮膚がんバリエーションアトラス

書評者：常深祐一郎(東京女子医科大学准教授・皮膚科)

見たことのないアトラスが出版された。アトラスといえさまざまな疾患の画像が収められているものというのが私の常識であった。頻度の高い疾患からあまりお目にかからない疾患まで広く網羅されているものである。それがこの『皮膚がんバリエーションアトラス』では、なんと基底細胞癌と有棘細胞癌、悪性黒色腫という三つの皮膚癌で全紙面の7割を占めているのである。基底細胞癌に95ページ、有棘細胞癌に70ページ、悪性黒色腫に71ページが費やされている。尋常ではない。

どのようにしてこれだけのページ数が埋められているかというと、そこがバリエーションである。同じ疾患の膨大な数の症例写真が集められているのである。

実臨床では、同じ疾患といっても、一つとしてまったく同じ臨床像はない。バリエーションそのものである。よって、皮膚科医は多くの症例を日々見続けて初めて実

臨床で通用するようになる。経験がものを言うゆえんである。このアトラスにはきわめて多くのバリエーションが濃縮して詰まっている。本来なら何年もの期間を要するところを、短期間で効率よく経験してしまうというのがこのアトラスの狙いであろう。臨床像とダーモスコピー像の写真が対になって提示され、簡潔な所見が添えられている。文字が少ないのでほとんど見えていくことができる。

これは調べ物に使うアトラスではなく、読み通すアトラスである。そして怒濤の症例写真を読み進めているうちに気が付いたことがある。バリエーションを見ているはずなのに、きわめて多くの症例を浴びていると、その中に共通する本質が見えて来るのである。文章でいくら説明されてもわからないひらめきのようなものが頭の中に形成されていく。言葉で説明するのは難しいが、画像を見た瞬間それが何なのか「わかる」ので

ある。考える前に答えが出てくる、答えを思いついてからその理由を考える。これを暗黙知という。ベテラン皮膚科医はそのように診断している。

皮膚科学は形態学である。本書の「序」にもそのように書かれているし、私も他誌で何度かそのように述べたことがある。形態学の神髄は暗黙知である。そこに至るためには、たくさん見るしかない。文字ではなく形態を見なければならぬ。百聞は一見にしかず、である。それを体現した究極のアトラスが本書である。ぜひ手にとってバリエーションのシャワーを浴びていただきたい。そしてベテラン皮膚科医の眼力を手に取ってもらいたい。

● A4 頁 384 2016年5月
定価：本体 15,000円＋税
[ISBN978-4-260-02472-3]
医学書院刊